

# 札幌学院大学 人文学部報

Sapporo Gakuin University

●人間科学科 ●英語英米文学科  
●臨床心理学科 ●こども発達学科  
●大学院臨床心理学研究科

2007・5・1

No.

26

編集発行/札幌学院大学人文学部広報委員会  
〒069-8555 江別市文京台11番地 ☎011-386-8111(代)

人文学部wwwトップ: <http://www.sgu.ac.jp/humanities/index.html>  
本誌バックナンバー: <http://www.sgu.ac.jp/hum/publish/gakubuho/index.html>



## 教育・研究生生活の足跡「日本の女子マラソンはこうして始まった」出版にあたって

笹岡 征雄

「布施学長と陸上競技部員・OGに囲まれて」

現・札幌学院大学の前身の勇氣ある乙女たちの挑戦の記録です。「彼女たちは泣いていた。その涙は決して単純な感情の発露で

らの留学生との交流を通じて実現したランニングによる国際交流の実践などを含め、私の四十四年間に及んだ体育教師としての「教育・研究の足跡」の集大成です。

### 第一部 マラソン教育と国際交流の実践（日本の女子マラソンのパイオニアとして）

マラソン教育と国際交流の実践（日本の女子マラソンのパイオニアとして）陸上競技の指導に邁進／中国及び韓国との交流／市民マラソンの普及に奮戦／陸上競技研究誌「挑戦」の四十二年間

生い立ちと家族、仲間たち（岩見沢の鮮魚店の次男として出生／小学校のPTA会長経験で得た「教育とは」／思い出に刻み込まれた人々）

### 第五部 主要業績目録

最近、教育基本法の見直し論議が賑やかになっています。教育者の一人として、やはりその行方が気になっています。私は常に「実践」を通じて新しい「挑戦の世界」を切り開いて来たつもりです。難しい教育論などは分かりませんが、そんな私なりの「実践教育」が、今の教育基本法を見直す議論のなかにあつて、一つの参考資料になれば、この上ない喜びと思っております。

私のなかの歴史（陸上競技選手・笹岡征雄の誕生／日本のトップラ

### 第二部

ボブスレー・リュージュ競技との出会い（札幌冬季オリンピックの開催がきっかけに／ボブスレー・リュージュ競技に関する研究

### 第三部

私のなかの歴史（陸上競技選手・笹岡征雄の誕生／日本のトップラ

はなかつたと思う。万感を胸に秘めた、いわば宝石にも等しい貴重な涙であつたであろう（第一章「日本の女子マラソンのパイオニアとして」から）。そうした彼女たちの並々ならぬ努力によって、日本の女子マラソンの「開拓元年」が切り開かれたことを、より多くの人たちに知ってもらうことは、指導者としての私の努めと考え、筆を執らせて頂きました。

ほかに、札幌学院大学男子駅伝チームの全道大学大会十連覇達成、あるいは中国及び韓国か

世の中の「常識」には、それに先立つ「非常識」の時代があるものです。今ではだれもが、何の差し障りもなくエンジョイしている女子マラソンもやはり、「非常識」といわれた時代がありました。

本書は、そうした「世間の目」に屈することなく、日本の女子として初めて網走でフルマラソンを走破し、さらに当時国内で認められなかったフルマラソン大会に出場するため、ポストンマラソン大会にも参戦、完走を果たした札幌短期大学（当時、

2007年度入学試験結果

【人間科学科】

Table with columns for 志願者数 (2003-2007) and 合格者数 (2003-2007) for various categories like 一般A, センターA, etc.

【英語英米文学科】

Table with columns for 志願者数 (2003-2007) and 合格者数 (2003-2007) for categories like 一般A, センターA, etc.

【臨床心理学科】

Table with columns for 志願者数 (2003-2007) and 合格者数 (2003-2007) for categories like 一般A, センターA, etc.

【こども発達学科】

Table with columns for 志願者数 (2003-2007) and 合格者数 (2003-2007) for categories like 一般A, センターA, etc.

【大学院臨床心理学研究科】

Table with columns for 志願者数 (2003-2007) and 合格者数 (2003-2007) for categories like 一般, 特別選抜.

二〇〇六年度学位記授与式

第二十七期人文学部卒業生三三七人に学士(人文学)号 第六期大学院臨床心理学研究科修了生十人に修士(臨床心理学)号

二〇〇六年度学位記授与式が、三月二十三日、北海道厚生年金会館ホールで挙行された。

床心理学科九八人に学士(人文学)号が、大学院臨床心理学研究科十人に修士(臨床心理学)号が授与された。

これにより人文学部卒業生の総数は、五、七五〇人(人間科学科 三、七七八人、英語英米文学科 一、七七八人、臨床心理学科 三二五五人)となった。

二〇〇六年度

臨床心理士資格試験合格者

日本臨床心理士資格認定協会による、二〇〇六年度の資格審査は、一次試験(筆記試験)十月十四日、二次試験(面接試験)は十一月十八日(二十日に実施され、本研究科修了生は、過去最高

の合格数となる一二名が合格した。合格者の氏名は表に示すとおりで、内一名は過年度の修了生である。今回の受験者は二三名で合格率は九二・三%である。因みに、全国の合格率は六五・五%であり、本研究科が全国と比較して極めて高い合格率を維持していることが理解される。

また、今回、全国の高合格者は、一、六三五名で、全国の臨床心理士は、一六、七三二名に達する。社会の臨床心理士に対する期待は益々大きくなるものと考えられ、臨床心理士の養成に携わるものの責任の重さを改めて痛感している。(安岡 馨)

合格者名簿

◎臨床心理学研究科修了生

- 細江真紀子・小川亜矢子 浅利 猛・阿部 真之 大館 徳子・奥 玲子 川口 朋子・工藤麻起子 藤澤麻弥子・松崎 亮介 森田 和洋・山崎 奈緒

臨床心理学研究科修了生

第六期生修士論文発表会

二〇〇七年三月に大学院臨床心理学研究科修了予定者一〇名の修士論文発表会が、二月二十三日、B一〇一教室で実施された。各人の修士論文のテーマは左記に示すとおりである。研究テーマ、分析手法とも多岐にわたり、今後の臨床心理学の幅広

第六期生修士論文テーマ

- 榎本 志保 「乗り越えた感尺度」作成に関する研究
熊野美智子 子どもの亡くした母親の悲嘆に関する研究
大橋 恵美 星と波描画テストの基礎的研究
岡村 修一 思春期・青年期の居場所についての研究
千葉明日希 想定書簡法における内的体験が感情変化に与える影響
沼田亜沙子 青年期における

平成十九年度

教員採用候補者選考の結果について

全国的には、関東・関西圏で小学校教員の採用は、三倍を切るなど、状況の変化が著しいが、本道における中学・高校教員の採用検査は高倍率が続いているといつてよい。そうしたなか、来年度に向けた採用検査では本学から五名が登録となった。内四名が、人文学部出身者であった。とりわけ高倍率の社会科関係では成果が出なかったが、中学英語三名・高校英語一名とすべて英語系米学科出身ということになった。

とくに、現役で栄冠を勝ち取った板垣雄介君は、一次検査前に専門試験免除に必要な資格取得をしていたことが、登録につながった。加えて、英語科教育法の桜田先生には二次試験対策を、「対策講座」と銘打ってオープンにし時間を割いていただいた。また、以前の学科の先生方の日頃の努力ともあいまって、過年度生三名も採用となった。進藤恵さんは千葉県と道のダブり登録であり、吉田敦君も期限付き教員をこなしながらの登録であった。また早坂太吾君も専門科目免除の卒業生であった。今後の教職課程に直結する免許更新制の導入も取り沙汰されている今日、どのように魅力あ

二〇〇六年度 半期海外留学

今年度の半期海外留学生は英語英米文学科から一七名、人間科学科から一名、計一八名を数えた。米国へはカリフォルニア大デーヴィス校に男子二名、女子五名が、同じくシアトル近郊のパシフィック・ルーセルン大に男子二名、女子二名が、そして豪国メルボルン近郊のモナッシュ大に男子三名、女子四名がホームステイをしながら現地地研鑽を積んだ。たんなる語学教室であれば、日本の大学でも実施されている。留学の目的は、現地での様々な異文化体験を通して広い視野を得ることにあろう。なお、二〇〇七年度からイギリスのエクセター大学が半期留学先に加えられる。帰国した学生は教員採用試験現役合格や税関勤務につくなど、経験を活かし活躍している。今後も英語英米文学科は総力をあげて留学プログラムの充実をはかりたい。(岡崎 清)

卒業生の動向 大学院進学者および合格者(2007年度分)

Table with columns: 氏名, 学科, 卒業年, 修業種類, 進学先, 進学先及び合格. Lists graduates and their postgraduate paths.



二〇〇六年度

卒業論文紹介

## 人間科学科

## 社会・福祉領域

社会・福祉領域では本年度は三名から卒業論文が提出された。発表会は、「仕事・キャリア」「文化」「老い」「子どもと家族」「若者・少年」「支援」の六つのテーマ別に部会で編成し実施された(各六名)。ここでは一つ一つの発表の内容にまでは立ち入ることはせずに、それぞれの部会でとりあげられたテーマを中心に、発表会の様子をお伝えしたい。

第一日目の「仕事・キャリア」部会では、フリーターやニートといった若年層の雇用をめぐる諸問題やいわゆる格差論、スポーツ選手の引退、さらに障がい者の雇用就労問題がとりあげられた。大学生である彼らの視点から「仕事」や「キャリア」について考えるといった内容のもが目立った。つづき「文化」部会では、血液型、笑い、映画、中国の対日感情、ジャズ、歌謡曲といったようにさまざまなテーマでの報告がなされた。自らの興味を出発点としたそれぞれにユニークな報告がなされた部会であった。「老い」部会でもりあげられた高齢期の諸問題は、生きがい、自動車の運転、生涯教育、認知症、住宅といったように広範囲にわたるものであり、加えて、介護保険制度下においてケアマネージャーが抱えるジレンマが問題化された。現代の高齢者福祉にかかわる諸問題に正面から取り組んだ力作の多い部会であった。

## 第二日目の「子どもと家族」部会

では、父子関係、異年齢集団、不登校児童とその親、障害者と家族、子どもと読書といったテーマがとりあげられた。子どもをテーマとしているわけではなかったが加えて、過疎地域における教育をテーマとした発表もなされた。「若者・少年」部会では、大学生の食生活、個人の発達、サークル活動、少年非行の構築、オタク、若年層の携帯電話使用といったテーマがとりあげられた。第一日目の「文化」と同様に、さまざまなテーマが集まった。最後に、広く福祉的な関心をもつテーマを集めた「支援」部会では、障がい児の母親、不登校児童、女性障がい者についてそれぞれへの支援のあり方がとりあげられるとともに、情報技術と「障害」をめぐる考察、グループホームの体験的考察、身体拘束をめぐる実証的研究など内容についても方法についても興味深い報告がつついた。

地域社会における諸問題や福祉といった本領域がカバーしている主たる問題領域はもちろんのこと、サブカルチャーをテーマとした発表もいくつかみられ、全体としてバラエティに富んだ発表会であったといえる。また、研究方法についても堅実なフィールドワークに依拠したもので多様であった。いずれにせよ、学生生活を締めくくるそれぞれの成果が一人の欠席もなく発表されたことをうれしく思う。発表会には三年生以下の学生も数多く参加し、四年生

生同士での議論にはなかなか展開せず、個々の発表への質疑は主として教員によるものであった。フロアとのやりとりをもう少し活発なものとしていくにはなんらかの工夫としかけが必要であろう。(木戸 功)

## 心理・教育領域

今年度、本領域では四二名の学生が卒業論文を提出した。以下に、本年度の卒業論文の傾向・特色などについてゼミごとに紹介する(なお、文章はそれぞれのゼミ担当者が執筆したものである)。

小林好和ゼミでは、乳幼児の人を含む外界の認知や生物概念の理解の発達、老年期における身の回りに存在するさまざまな記号の理解、生涯発達における特定領域の熟達化、エスノメソドロジーの手法を用いた会話場面の分析に関する研究がおこなわれた。石黒由佳「相互行為による話し合いの場面の一考察」では、特定課題に関する意見の陳述、不一致、変容などに注目しながら、膨大な発話資料をもとに話し合いの質的分析を行ない、その構造的な側面が話し合いの過程において生成・組織化されていくプロセスを見出し続けている。

鈴木健太郎ゼミでは、日常生活における認識・行動およびその基盤となる環境について、実際の生活行動を調査することによって理解することを目指した。日々の生活の中で起こしてしまう些細な誤りであるアクションスリップの性質を日誌的調査手法で検討した野田香織「日常生活に起こる行為のスリップに関する研究」、サッカー経験者の試合における状況判断スキルを対象者へのインタヴュー調査をもとに検討した南部幸絵「サッカー選手の状況判断スキルに関する研究」など、調査手法を

工夫した研究が興味深い事実を見いだしていた。また、子どもの発達の主たる基盤となる家庭を家族成員の共発達の場として検討した赤堀翔子「家族的に捉えたいきよみ」の発達に関する諸条件の相違」など、発達環境に焦点をあてた研究も目立っていた。

今年度の舛田ゼミの卒業論文は、①対人認知や印象形成における非言語的情報の働き、②友人関係、③その他、の三つに分類される。心理学研究においては、仮説を事実に基づき検証すること、またそのためにある程度の数のデータを求めることが求められる。本ゼミの学生達は、拙いながらも、時間をかけて仮説を立て、ほぼ十分な数のデータを集め、時間の許す限り細かい分析・考察を試みていた点を、積極的に評価したい。

中でも「視線行動が印象形成に及ぼす効果」について(米沢睦美)「一は、著者自身がサクラとなって男女各二〇名との会話を行うことを通じて、初対面の人から受けた印象が、その人とのアイコンタクトの有無を伴う会話によってどのような影響を受けるかについて、実験的に検討し、アイコンタクトがある方がより好印象となることを確認した。このような、労多き、しかしデータと取り組むことの重要性を学生自身が認識しうる学習活動は、教員にも労多きものだが、実に貴重である、というのが毎年の感慨である。

工藤ゼミの論文提出者は二名であった。潮見太郎「歴史認識修正に及ぼす先行オーガナイザの効果」は、ともすればバラバラな知識の暗記に終始しがちな歴史学習において、歴史的事象どうしを関連づけるための枠組み構造(スキーマ)を構築することが重要であることを実証

した。三浦優作「現代大学生の友人関係」は、関係の希薄化をしばしば指摘される現代青年の友人関係について、「つきあいの深さ」と友人に対する「やさしさ」との関連を検討した。その結果、友人と深くつきあう傾向のある学生は、友人のためなら、あえてきびく接するといった、いわゆる「旧世代のやさしさ」を示す傾向のあることが見出され、現代青年の友人関係が旧世代と比べて希薄化しているとい概に言えないことが明らかとなった。

今年度の富田ゼミでは、障害児者の福祉と教育、および特別支援教育関係、さらには子育てをめぐるストレスとネットワークや若者の就業状態や支援等のテーマが選ばれていた。そのなかで加藤真有さんの「小学校における特別支援教育対象児童に対する教育支援」からランティアとしての関わり方の考察」は、軽度発達障害児と関わった観察から、「視覚的にわかりやすい教材の提示」「クラス全体への指示だけではその子には伝わらないが、目の前で動作の例示がなされれば学習内容が理解できるようになる」など、通常学校で彼らがクラスメイトとともに学び合うための学習環境の工夫・改善を具体的に提示していて説得力があった。(工藤与志文)

## 文化領域

文化領域では二七名が卒業論文を提出し、うち七名がA評価を受けた。福島望希「北海道縄文時代の周堤墓について」は、遺跡分布や出土遺物から縄文時代後期の墓制を考察し、道央・道東の交流についても言及した。三年の文化実習調査の際の現地観察と関連資料の綿密な収集に基づき、先行研究もふまえた堅実な

論文である。工藤知子「ニンニク信仰の有無」は、文献資料を踏まえ、日本文化史のなかでのニンニクの呪術的な力について考察した。「自他ともに認めるニンニク好き」である筆者の思いのたけが込められた、自田美沙子音階からみる日本の童謡「唱歌およびわらべうたの曲調の違い」は、難解な先行研究を読み解いたうえで、童謡、唱歌、わらべ歌の音階を独自に調査し、歌謡のジャンルの違いと音階との関係を示した労作である。田中航樹「ナマハゲについて」の始原研究は、故郷の秋田県男鹿半島の民俗の起源について、先行研究を検討しまた各種報告書のデータを再整理しながら、論じた。遠藤宣仁「アルバイトの離職と防衛機制」は、近年話題を集める若年層の早期離職と心理学という防衛機制との関連について、自らがアルバイトとして働く職場の許可を得て大規模な意識調査に成功し、実証的な論を展開した。歴史学関連のゼミの卒論では、青山友「北海道高校剣道史」と松原亮太「テレビゲーム産業について」の考察が充実していた。青山論文は、道内各種の剣道大会関係資料により、東海四高が成績がよく、また胆振地区の剣道が盛んなことも指摘し、その理由を指導者や施設に求めた。松原論文は、『レジャー白書』と『有価証券報告書』を基礎資料として、テレビゲーム市場と企業の推移を分析し、テレビゲームの複雑化によるゲーム離れ、世代交代等がテレビゲーム産業の停滞に繋がっていることを論証したものである。(奥田 統己)

思想領域

奥谷ゼミでは、親鸞を取り上げた

ただひとつの論文を除いて、すべて環境関係をテーマとする卒論であった。そのなかで最も高い評価を受けたのは、中野彩子「環境教育を身近なものに」であった。本学学生にたいするアンケート調査をもとに、日本の遅れた環境教育の現状と西欧諸国の環境教育への先進的な取り組みを対比させながら、今後の日本の環境教育を展望した力作であった。吉田淳「外来種問題」も我が国で分布を広げているさまざまな外来種、とくにアライグマを取り上げて、その現状と対策を論じており、また山田紘史「自然破壊の現在についての考察」も、森林に焦点をあてて、森林の役割、森林破壊の実態、森林保護の活動のあり方を広範囲に論じた好論文として評価された。

川合ゼミの卒論は、七本中五本が文学関係のもので、なかでも佐藤淳平の「暴力」を中心に『ねじまき鳥クロニクル』を読むは三浦になる大作に正面から真取り組み、「暴力」に着目して解き明かした、新機軸の出色の論文である。より複合的な視点があればなお良かった。下野舞子の「アンネ・フランク」(書くこと)の「意味」は、発狂を防ぐ為に厳しく制限され、狭い空間での多人数での潜伏生活という極限状況のなかで、思春期の少女が「書くこと」に託した夢や想い、その役割や意味を、彼女が遺した日記、童話、同時代人の証言等を丹念に調べ上げて考察した好論文であるが、迫害の状況と歴史的資料などを使用し、当時のユダヤ人迫害の表情を背景に置いて対比させればと惜しまれる。

杉山ゼミでは、本城麻希「臓器移植におけるドナー不足問題について」が、現在の新しい問題状況(ドナー不足の原因や移植法改正案な

ど)を論じて高い評価を得た。また社会人学生の井上秀美「北海道の療育」をハンナ・アレントの思想から考える」は、アンケート調査にもとづき、療育園施設職員の活動状態を考察したもので、アレントの理論を適用するに多少無理があったものの、大部の力作であった。興味あるテーマとしては、内手美穂の「古い」論がある。現今の古いブームのひとつの問題として設定し、人はなぜ古いを信じるのかを問い、資料を駆使して難しいテーマを論じ切った。(奥谷 浩一)

英語英米文学科

英語英米文学科の卒論は必修ではないが、登録した七名全員が提出できたことを喜びたい。

菅野達也(中村ゼミ)の「アメリカのボケモン」は、日本のボケットモンスター(通称ポケモン)が、なぜアメリカでもこれほど流行ったかについて、アニメ、映画、カードゲーム、そして社会現象の点から考察した。

グロース・ゼミの三宅由美は、英語論文「Alice in British Literature and Society」を発表した。その中で、『不思議の国のアリス』など有名な小説家ルイス・キャロルについて、彼の間像と背景にある一九世紀英国社会との関連を論じた。

片山喜博(山添ゼミ)の「左右に関する表現の日英比較」は、「事業が左前」「事業が右肩上がり」や「left-handed compliment」「his right hand man」などの例を取り上げ、方向性を相対的に捉える日英語において、「左」(left)と「右」(right)を含む表現の意味やイメージの差を比較考察した。

菅原ゼミからは、二本の卒論が提出された。富田祐一のテーマは「夏目金之助が発狂した本当の原因とは？」というユニークなもので、夏目漱石がイギリス留学の際に神経衰弱になった要因を東西の文明の衝突を背景に考察した力作であった。早川恵子のテーマは「英国のバブについて」で、副題にあるようにバブは「イギリスでどのように始まり、なぜ今日までバブは続くことが出来たのか」を自身の留学体験をまじえて検討した。

岡崎ゼミからも二人が発表した。中島駿輔の「ジャズの歴史とジャズが与えた社会的、文化的影響」は、ジャズ一〇〇年の歴史を広範な視点から論じ、日本におけるジャズにも触れている。金森亜希子の「日系アメリカ人作家Jingo Meleの作品研究」は、短編小説集『カリフォルニア州ヨコハマ町』(一九四九年)を扱った。そして、日本人の顔を持つアメリカ人作家の視点から書かれた短編集である、と論じている。

どの卒論も、ゼミでの研究成果を発展させた意欲的なものばかりだ。きつと満足していることだろう。皆さんも、その充実感を味わってほしい。(中村 敦志)

臨床心理学科

二〇〇六年度臨床心理学科第三期生の卒業論文発表会が二月十三日に行なわれた。登録者数は昨年、一年とほぼ同様に学生の約半数であったが、提出率は五〇%から七四%へと飛躍した。粘り強く取り組んだ学生諸君には惜しみない称賛を、提出まで学生を導かれた先生方には心からの感謝を寄せたい。いくつかの研究を紹介しながら、本年度の発表会を振り返ってみよう。

伊藤則博ゼミの高山恵珠さんは、発達障害児の居場所作りの実践への参加観察を行なった。共同体が脆弱になり、地域の教育力の重要性が叫ばれる現在、多様な他者と関わりの持てる居場所の研究は時宜を得たものと言えよう。同ゼミの高崎智朗君は児童養護施設での面接調査を行なった。とくかく被援助者の精神的困難の解決に目が行きがちだが、彼は援助者である施設職員に焦点を当てた。援助者の抱える問題の把握と除去に関する研究は少なく、従来の諸研究の欠損を埋める意義ある論文となった。ここ数年、他者を過剰に低く評価することで自尊心を維持しようとする若者の存在が注目を浴びている。このような心性の形成が、若者の対人関係経験に影響を受けている可能性を示唆したのは、葛西俊治ゼミの神谷有香さんである。食言による言葉が人口に膾炙しているように、食活動は本能的な生命維持活動ではなく、すでに文化的に制御すべき行動である。滝沢広忠ゼミの頼所あかねさんは、食事回数や孤食傾向などの食習慣と精神的健康度との関係を研究した。時局を見据えた研究としては他にも、いじめからの回復を扱った安岡登ゼミの高島博史君の論文を挙げる事ができる。また、例年のごとく芸術療法に関する基礎的データを丹念に収集した佐野友奈ゼミの一連の発表や、大学生の職業決定と家族のサポートの関係を扱った、橋本忠行ゼミの長尾智誠君のスマートな研究が目を引いた。来年度はさらなる質と量の向上を目指して、指導体制の充実と学生諸君の奮闘を期待したい。(森 直久)



# 1つでも発達学科新入生を

## 迎えるにあたって

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。これからごも発達学科の一年生としての大学生活が始まります。大学生という実感をもち、有意義な大学生活にして欲しいです。大学は高校とは違い色々な自由な設備があります。そういった大学の自由な設備が大学のいいところなので、十分に利用してください。また、新しいことだらけで、一年生のみなさんは何をやっていいかわからなくなるかもしれません。履修のことやサークル活動や学校生活そういったことでわからないことがあったら、ごども発達学科の先輩にどんなことでも遠慮なく聞いてください。先輩達は喜んで色々アドバイスをしてくれると思います。大学では大勢の人と出会います。この人との出会いは、これから始まる大学生活で本当に大切なので一年生の皆さん一緒に色々な話や行動が出来る仲間を是非作ってください。大学生活では様々な出来事があると思いますが、その大学生活を楽しくするのは、自分自身です。楽

しいことは待ってもなかなかやってきません。だからこそ勉強に打ち込むのもいいし、バイトを一生懸命するのもいいし、サークル活動に一生懸命取り組むのもいいし、友達といっばい遊ぶのもいいしとにかく何でも挑戦することが大切かなと思います。自分が知らないことを怖がらず、どんなことでも「あのときやっとならばよかった」と思うことがないように、色々なことに挑戦してみてください。挑戦してみると意外に簡単にできたりして、思っていたより楽しいことが沢山あります。ですが、なにをやるにもはじめが必要になってきます。はじめをつけてやらなければ中途半端になってしまうので、どんなことにもはじめをつけてやっていきましょう。大学生活は学生生活としての最後です。だからこそこの最後の学生生活で自分の本当にやりたいことを見つけて出来るような大学生活にしてください。

(ごども発達学科二年

小木曾 準也)

## 先輩英語教師と語る

英語教員採用試験で、英語英米文学科から四名が合格。浪人が当たり前の中、現役合格を果たした板垣雄介君は見事だ。

一月十二日、英語教員志望者に、合格体験を語ってくれた。

「まず、TOEIC七三〇点以上を目標に、毎日五時間、英語を勉強しました。目標を達成し、専門試験が免除。これが合格の鍵です。そして教養試験の勉強をし、夏休みには、面接の特訓を教職の先生から受けました。そのお陰で、本番では力を発揮



板垣雄介くん

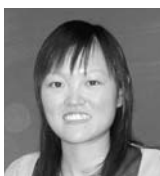
することができたと思います。」  
板垣君は、留学経験はなく、予備校にも通わなかった。大学と自主学習だけで、合格を果たしたそうだ。

当日は、本学科卒の先輩教師九名も、道内外から集まって下さった。奥尻高校教諭の谷脇麻美さん(〇四年度卒)も、その一人だ。谷脇さんも現役合格だが、やはり「TOEIC七三〇点か英検準一級」が、合格の決

め手だと力説された。さらに、英語以外にも何か打ち込めることがあると望ましいとのこと。今は、英語教育と同じ位、バレーボール部の指導に情熱を注がれているそうだ。

他の先輩教師の方々からも、現場の生の声を多く聞かせて頂いた。先輩の助言を生かし、一人でも多くの人が英語教員になることを期待している。

(中村 敦志)



谷脇麻美さん  
(2004年度卒)

## 奥谷浩一教授、 京都学園大学で 講演する

昨年、提携校である京都学園大学人間文化学部から廣川和子本学人文学部長をつうじて、私奥谷に研究発表と講演の依頼があり、これに応じて同大学で研究発表と講演を行ったので、報告したい。

十月二十五日、同大学人間文化学会で、「我が国の脳死・臓器移植の現状と課題」と題する研究発表を行った。我が国の脳

死判定基準が諸矛盾を含んでおり、脳死を一律に人の死とする臓器移植法改正案がこの矛盾を増幅しかねないことを指摘した。小川賢治学部長を初め参加者からは、論旨の展開に「知的興奮を覚えた」とのご感想を聞いた。

翌二十六日には、「北海道の自然と人間の共生を考える」と題して、市民と学生向けの講演を行った。参加者はおよそ二百人で、大講堂がほぼ満席となった。映像を見せながら、一般に豊かだと思われている北海道の

自然生態系が森林伐採やダム・大規模林道などの建設で今大きく破壊されている現状を紹介し、環境にたいする人間のモラルを訴えた。参加者は自然の裏側で破壊が広汎に広がっている光景に大きな衝撃を受けたようである。終了後、北海道にゆかりのある二人の方が挨拶に来られた。さらに社会人学生で主婦の方から北海道で海岸清掃の活動に参加したいとの申し込みがあった。これらのごとも私は嬉しいことであった。

(奥谷 浩一)

## 留研を終えて

## ——イギリスのサービス——

人間科学科 松川 敏道

イギリスのサービス事情の悪さは有名である。住む場所も決まらないまま始まった二〇〇五年留研生活は、端からこのことを実感した。イギリス到着後、必死の思いで探した住居には入居までに七日必要だと言われた。その間家族三人ホテル住まいをし、約束の日ホテルをチエックアウトしてスーツケースを引きながら不動産屋に行くこと、さらに五日必要だと言われた。えーっ。最初の七日程度は想定範囲だったにしても、さら



に五日というのは精神的にも金銭的にも海外初心者にとっては一大事のことのように思えた。何より五日延びた理由がわからない。なぜ？困るんだけど…結局取り合ってもらえず、仕方なくホテルの延泊に家族三人で一〇万円をはたいた。サービス絡みの似たようなことはその後幾度となく経験したが、イギリスでこれから半年楽しく生活するコツは忍耐とあきらめることだと最初に学んだ。

ところで肝心の研修先だが、受け入れてもらったのはノッテインガム大学社会学・社会政策学部であった。知的障害児者の虐待に関する研究機関をもっていることが研修先に選定した理由であった。社会的ケアを提供している場で起きる虐待を、イギリスはどのように考えどのように対応しようとしているのか。論点はいくつがあるが、結局実践的に重要なこととして考えられているのは人々の生活の質や人々が経験するケアサービ

スの質である。どうすればサービスの質は向上するのか。過去一〇数年、ケアサービスの質を定義し、計測し、監視し、改善しようという努力を不断なく展開してきたイギリスのケアサービスは、まさに制度の見直しと発展の歴史であった。研究者を見ていてもフィールドに出てみても、サービスの質向上に向けて妥協しない執拗なまでの意

## 留研を終えて

## ——行ってみるもの——

英語英米文学科 平体 由美

二〇〇五年十月から二〇〇六年九月までの一年間を、アメリカのノースカロライナ大学チャペルヒル校付属南部文化研究所客員研究員として過ごしてまいりました。

留研の第一の目的は児童労働研究を仕上げることでした。研究所が豊富に所蔵している資料を利用し、アメリカ政治機構史学会での報告を経て、何とか形にすることができました。

問題はその後です。長期間取り組んできた課題が完結し、「さて、次はどうしよう…」と途方にくれてしまいました。記憶論

志を感じさせられた。むろん課題もあるが、より良くするためには必要なことは忍耐とあきらめないことだと肌で感じた。イギリスのケアサービスの有り様は大いに参考になる。

時に身悶えするほど一般のサービスの悪いイギリスと、弱者のサービスに無頓着な日本とどちらがいいかと問われれば、前者であると思う。

や制度論、公衆衛生など、いろいろやりたいことがあったはずなのに、アタマが動かなくなってしまったのです。学生時代の期末試験の後に感じた解放感と虚脱感に似た状態でした。そのときは「とりあえず掃除とバイト」でリズムを取り戻したのですが、今回はそうはいきませ

ん。そこで、気分転換に近在の町や村の歴史博物館を訪れてみることにしました。近郊の町なので展示の内容に大きな違いがあるわけはありません。全国的に有名な人の資料があるわけで

もありません。最初はほとんど期待せず、ドライブ気分で行ったのです。

ところが、歴史博物館をいくつかまわるうちに、妙に気になることが出てきました。一つは、小さな町なのになぜいちいち歴史博物館が置かれているのか、もう一つは、食事やキッチンなどについては必ず展示があるのに、なぜトイレの展示がないのか、ということでした。気になっちゃったら止まりませ

ん。他の博物館で探してみたり、館員に尋ねてみたりしました。皆さん、博物館の設立経緯は親切に答えてくださるのですが、トイレに関しては「…？」かなり意表をつかれたようです。

ここに至って私は虚脱状態から抜け出しました。トイレがらみの記憶と制度は先にやろうとしていたことに通じています。トイレだ、寄生虫だ、腸チフスだ…。都合のいいことに、研究所にはこれらの原資料も眠っておりませんでした。

現場に行かなければ出てこない着想、発想、ひらめきはあるものです。このような機会を与えていただいた大学・学部に感謝します。

2006年度学部教員の人事・研究活動等

(10/1~4/1)

◎教員の異動

▼退職 (三月三十一日付)

●廣川 和市 (現代の教育)

●池田 光幸 (心理学研究の倫理と関連法規)

▼採用 (四月一日付)

〈専任〉

●教授 田形 修一 (臨床心理学総論 広島国際大学教授)



●講師 山越 康裕 (論述・作文) 札幌大学非常勤講師他



〈特任〉

●教授 大垣 清美 (体育科指導法) 札幌市立三角山小学校長他



〈契約特別任用〉

●教授 横山 太範 (精神保健学、精神科リハビリテーション)



ン学) さっばろ駅前クリニック院長

◎海外研究出張

●D・W・ヒンクルマン ○六年十一月一日〜十一月十九日

中国「Pac CALL国際大会」

●葛西 俊治 ○六年十一月三日〜十一月十二日 アメリカ「ボストン日本協会及び北海道マサチューセッツ協会の後援のもと舞踏に基づく身体心理学的アプローチを①舞踏公演②ワークショップ指導③講演によって紹介し日本文化交流・学術的交流を行う。」

●諸 洪一 ○六年十二月二十四日〜〇七年一月七日 韓国「史料調査 釜山市立図書館他」

●川瀬 裕子 ○七年一月一日〜一月八日 ギリシャ他「デルフィの野外劇場を中心に、演劇研究の為の資料収集他」

●臼杵 勲 ○七年一月二十九日〜二月五日 カンボジア「国際シンポジウム Early Settlements in the Neolithic period and the Production of Khmer ceramics 参加」

●川瀬 裕子 ○七年二月二十

二日〜三月二日 アメリカ「アメリカ文学・文化・演劇研究の資料収集及び観劇他」

●西 真木子 ○七年二月二十二日〜三月二日 アメリカ「移民文化の研究のための資料収集、アメリカ移民のインタビュー他」

●D・W・ヒンクルマン ○七年三月三日〜三月十日 オーストラリア「RESEARCH PROJECT WITH DR.PAUL GRUBA. UNIVERSITY OF MELBOURNE. "BLENDED LANGUAGE LEARNING"」

●諸 洪一 ○七年三月四日〜三月八日 韓国「国史編纂委員会および韓国関係史学会会員との交流他」

●小林 好和 ○七年三月四日〜三月八日 韓国「東国大学学生との交流、韓国初等学校の訪問、歴史的遺産の見学等を通じ、歴史的にも関係の深い韓国の文化、及び教育について学ぶ」

●工藤与志文 (共著)『学習者の誤った知識をどう修正するか ル・バー修正ストラテジーの研究』共著者(麻柄啓一、進藤聡彦、立木徹、植松公威、伏見陽児) 東北大学出版会 二〇〇六年十月十日 三三三頁 三二〇〇円+税

●酒井 恵真・湯本 誠 (編著)『地域産業の構造的矛盾と再生―北海道・東北・沖縄と英国の事例研究―』編著者(新妻二男)アーバンプロ出版センター 二〇〇七年三月二十日 二四二頁 一八〇〇円+税

●笹岡 征雄 (単著)『日本の女子マラソンはこうして始まった』二〇〇七年一月十日 二五四頁 三〇〇〇円

●坪井 主税 (単著)『資料』道内自治体の非核宣言・決議文等一覽』札幌学院大学坪井主税平和学研究室 二〇〇六年十月三十一日 五〇〇円

●山添 秀剛 (分担執筆)『英語多義ネットワーク辞典』瀬戸賢一 (編集主幹) 小学館 二〇〇七年二月二十八日 一一〇四頁 八五〇〇円+税

●湯本 誠 (分担執筆)『キャリアの社会学―職業能力と職業経歴からのアプローチ―』辻勝次編 ミネルヴァ書房 二〇〇七年三月二十日 二五六頁 五二五〇円 (税込)

◎委嘱発令 ●奥谷 浩一 北海道自然保護

協会常務理事 (北海道自然保護協会) ○六年五月〜〇八年四月

●奥谷 浩一 江別市社会教育委員会副委員長 (江別市教育委員会) ○六年八月〜〇八年七月

●片桐 元惠 江別市社会福祉審議会委員 (江別市長) ○六年十一月一日〜〇九年十月三十一日

●酒井 恵真 地域社会学会理事 (地域社会学会) ○六年五月〜〇八年四月

●新田 雅子 北広島市協働推進懇話会委員 (北広島市) ○六年十月三十日〜〇八年三月三十一日

●松川 敏道 札幌市地域自立支援協議会会長 (札幌市) ○六年十月十七日〜〇八年十月十六日

編集後記

今号は、学生・教員の活動成果を紹介しました。新入生の方々も大学でよい成果を得られることを期待します。

(編集委員長

臼杵 勲)